

図書館の徹底活用術⑭

民主主義の中の学びへの視座

John Deweyの『民主主義と教育 (Democracy in Education)』になぞらえて

枝元 益祐

皆さんの学習支援の為に図書館サービスの有用な活用方策についての近接領域を毎回紹介をしています。皆さんの学習活動を拡張する拠点である図書館を有効に活用する為の方策を実践活動や経験を通した学びに焦点を当てつつ前は、デューイ (John Dewey) の著書『学校と社会 (The School and Society)』に関して言及しました。

その中でDeweyは、一斉授業・画一授業に対し批判し、「教育課程の構成を可能性 (capacity) と経験に於ける子どもの成長の自然な履歴と調和するように形成」すること、及び、諸学科の配列や選択を「成長期の主要なニーズや諸力に最も適切に応える」(p.97) 形態にするという課題として捉え、子どもがその活動に於いて相互に助け合う「協同 (cooperation) と連携の最も自然な形態」(p.16) であり、心身の全体的発達により調和的で全面的なものとなり得るとの考えを強調しました。この考えの根底には、学校を「競争の場」から「社会的、協同的 (cooperative)」な場へ (p.17) と転換することの必要性があるということが出来ます。

今回は、上記のことを踏まえ、同じくDeweyの『民主主義と教育 (Democracy in Education)』に着眼したいと思います。この著作でDeweyは民主主義に於ける教育活動の特徴を「階級的、民族的、国土的障壁」を取り除き、「共有された関心の範囲の拡大や、いっそう多様な個人の可能性 (capacities) の多様性が解放されること」(p.87)として現わしています。また、Deweyは「様々な関心が相互に強まり作用」する為、「社会集団や階級の分離」に「反対して戦うことが民主的社会集団における教育の任務なのである」(p.249)とも述べています。この場合の民主主義は、「第一に共同生活 (associated living) の様式であり、連帯し共有された経験の一様式」として措定されると同時に、「様々な関心が互いに浸透し合うこと」は、「民主的な共同社会 (democratic community) を形成するうえで決定的な要件となる」(p.87)という認識を

提示しています。

この意味でDeweyは、学校を民主的社会に生きる人間形成の場として捉え、自ら思考し判断する能力の形成と共に、多様な経験・関心の共有や連帯・協同の生活を念頭に置いていると考えられます。様々に異なる集団間の交流がなく、関わり合いがなければ、社会は孤立した固定的集団の寄せ集めに過ぎないものになってしまう。多様な生活に於ける経験の自由な相互交流が阻まれるような場合には、それぞれの側の経験が十分に活かされず、その意味を喪失してしまうこととなります。Deweyが目指した、価値ある共同体の目的と福祉、「公共の目的への忠誠」、「相互関係に於ける共感」(p.82)が強調されるような真の社会の実現には、誰もが情報を利用する力や自らが判断し実行する能力がその前提となります。従って分離的な階級社会ではなく、民主社会にあって「すべての人々に対して知的機会が平等に用いやすく開かれて」いることが必須であり、そのような社会に於ける教育は「各人の着想力や適応性を発揮させる」(p.83)ように配慮されるべきであるという力強い信念が貫かれることとなります。Deweyは、「未熟性」は単なる空虚や欠如を意味するものではなく、寧ろ「成長の可能性」(p.41)であるとしその特徴の1つに「可塑性 (plasticity)」(p.42)を挙げています。「可塑性」とは「経験から学ぶ力」であり、「以前の経験の結果を基礎として行動を修正する力、性質を発達させる力を意味するものである」(p.44)とし、同時に「成長する力は、他者を必要とすることと可塑性に依存している」(p.52)とし、未成熟を成長・発達の可能性として積極的に位置付けていることは、様々な困難やニーズを持つ人間の成長・発達と教育の保障を考える上で極めて重要な視点であるということが出来ます。今回は、この部分に図書館のサービスがどのように関連するののかに関して探求したいと思います。

えだもと ますひろ(准教授・図書館学・教育学)